

マルクスにおける人間尊重の精神について

豊 田 全

Über den Gedanken der Hochachtung für den Menschen bei K. Marx

Tamotsu Toyota

I マルクスの基本的人間観

人間はすべて「対象的・自然的・感性的¹⁾」な現実的存在であるというのがマルクスの基本的人間観であった。これは彼の初期の著作『経済学・哲学手稿』(1844)の中に見られるのであるが、私はまずマルクスのこの人間について若干の説明をすることから始めようと思う。

「対象的・自然的・感性的」とは、人間が「自己の外部に対象・自然・感性をもつということ²⁾」であり、人間は外部の対象的・感性的自然に働らきかけ、その外部のものにおいて自己の生命力を発現する存在であり、このような働らきをなすことによってのみ存在しうるのであるということの意味し、そしてまた、人間は肉もあり、血もある身体をもった自然的存在であるからこそ、外部の感性的存在にはたらきかけ、その外部の感性的存在において、自己を確証するよりほかないことを意味している。このように、人間の活動は一人角力ではない。必ず対象的なのである。対象的活動はなんらかの意味において、身体をはたらかせて外部の対象にかかわる活動である。それは、それ自体感性的・対象的・自然的存在である人間が、外部の感性的・対象的・自然的存在にかかわる活動である。しかしここで注意しなければならないのは、人間の自然が主動的に外部の自然にはたらきかけるのであって、その逆ではないというのではないということである。人間の自然と外部の自然は相互にはたらきかける関係にあるのである。このような人間は、観念的につくり出さ

れたものではなく、生きてはたらいっている肉体をもった個体的・現実人間であることはいうまでもない。ここで個体的という言葉を用いたからといって、それは人間が孤立して生きているものであることを意味してはいない。現実的に対象的活動をする個体的人間は社会的存在なのである。人間が自然との対象的な相互関係において活動することは人間各自の生命過程の基礎であり、その活動は社会関係をぬぎにはありえない。人間以外の動物も生活の生産、生命過程の維持のために活動するが、人間もこれと同様、基礎的な活動である労働をなすことによって、その生活の生産、生命過程の維持をなす。ただ人間は他の動物とは異なり、生命の維持のために、彼らが必要とするものを自然から単純にとることをしない。彼らは生活の手段を生産する。「生活の手段を生産することによって、人人は間接的に彼らの現実的な物質的生活を生産している³⁾。」だから人人が生産するものと生産方法は、常にいろいろと彼らが生活の中に見出しそして再生産しなければならない現実的手段の性質に依存することは論をまたないが、それとともに、人人がこれらの手段を変換することができ、そして変換することによって、それら手段の自然的条件への一次的依存をかえることもまことである。人間の労働は自然に対する単なる適応ではなくして、自然条件の意識的な、そして意図的な変更である。人間は自然の物質を用い、そしてそれらの変換によって、人間が造った人工の物の世界を創造する。人間はただに動物的労働者であるばかりでなく、工作人 (homo faber) である。人間は自然的世界

と人工の世界の両世界に生き、そして行為している。このような人間は、いうまでもなく、身体をもち、対象的にはたらく主体的身体でなければならない。このような身体の人間がなす労働は、自然を無視することはできないが、またそれは社会にかかわりなく行なわれるのではない。人間は他者から孤立して生産するのではなく、相互に交渉しながら、そして協同しながら生産する。人間はどんな意味においても、他者とかかわりをもたずに、自然にはたらきかけることはできない。個体的人間から出発するマルクスは、その人間を社会から切りはなしたのではなく、彼においては、具体的な人間は同時に社会的でもあったのである⁴⁾。「特定の方法によって生産活動をする特定の個人は……特定の社会的なそして政治的な関係に入る。……」のは事実であり、諸個人は「物質的に生産し、そして人間の意志から独立の特定の物質的制限、前提条件のもとではたらく⁵⁾。」とマルクスはいつている。ここで示されている「物質的制限」は人間に与えられる自然的条件と社会的条件の双方にかかわる。これらの制限は結局は広げられうるし、条件もまた変更されうるけれども、ある時人間は既存の物質的條件のわく内に生みおとされ、そしてその中ではたらく。「生産の様式は単純に諸個人の肉体的生存の再生産であると考えられてはならない。むしろそれはこれらの個人の特定の形式の活動、彼らの生活の特定の形式の表出、彼らの側の特定の様式の生活である。彼らの生活の表出の仕方が、その存在の仕方である。それ故、彼らがそれであるところのもの（彼らの存在）は、彼らの生産、すなわち彼らが生産するところのものと彼らの生産方法と一致する。個人個人の本性は、彼らの生産を規定する物質的諸条件に依存する⁶⁾。」

II 生産の様式

「生産の様式」は、マルクスが、人間が自然と社会との双方に同様に交渉する複雑な過程を包括するために採用した一般的概念である。物質的条件としての自然と社会との間には弁証法的関係があり、人間と自然との交渉は、彼らの社会関係の性格を規定するが、他方において彼らの社会関係の性格は彼らの自然との交渉の様式を規定する。マルクスにとっては、この考え

方はドグマではなかった。反対に彼は「経験的に、そして何等の神秘化も思弁もなしに、社会的・政治的構造と生産との連けいを明らかにし⁷⁾」なければならないと主張した。そして彼はそれを明らかにするために、『生産力』と『生産関係』との両概念を採用しつつ、『経済学批判』の序言において、一般的理論の基本的提言をなした。「人間が行なう社会的生産において、彼らは必然的なそして彼ら意志から独立の特定の関係に入る。これらの生産関係は、物質的生産諸力⁸⁾の特定の段階に照応する。これらの生産関係の総体は社会の経済構造——現実的土台を構成し、その上に法的・政治的上部構築がそびえ立ち、そしてそれに対して社会意識の特定の諸形式が照応する。物質的生活における生産様式が生活の社会的・政治的・精神的過程の一般的性格を規定する。人間の存在を規定するのは、人間の意識ではなく、反対に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定する。人間の発展のある段階において、社会内の物質的生産諸力は、既存の生産諸関係——あるいはただ同じことがらの法的表現にすぎないのであるが、以前そのわく内で彼ら（生産諸力）がはたらいていたところのその所有関係——と矛盾するにいたる。これらの諸関係は生産諸力の発展の諸形式から、彼ら（生産諸力）の桎梏に変わる。そのとき社会的革命の時代がくる。経済的土台の変化と共に、広大な全上部構築が、あるいは急速に、あるいはゆるやかに改変される⁹⁾。」

III 対自的存在として人間

社会の変動を生産関係と生産力の矛盾によって説明したマルクスの理論において、生産力の契機として自然——人間の自然と人間外の自然——があり、したがって生産力の発展により変動せざるをえない生産関係に対しても自然の規定力を認めざるをえないということとは忘れられてはならない。がしかし人間は単なる自然物ではない。

さきにわたくしはマルクスが人間を単に対象的・感性的活動の主体としてとらえている——すなわち生物学的次元においてとらえている——のみでないことをのべた。人間は人間的な仕方に対象的・感性的に活動する存在である。いわば人間は「人間的な自然存在」

である。ここで『人間的』とは何を意味するのであるか。マルクスは人間独特の性格を、人間が「意識している存在 (bewußtes Sein)」であり、「自己自身に対してある存在 (für sich selbst seiendes Sein)」すなわち「対自的存在」であるところにみている。人間の感性的活動は、意識的な感性的活動である。マルクス自身の言葉でいうと、「動物はその生命活動と直接に一つである。動物はその生命活動から自分を区別しない。動物とは生命活動なのである。人間は自分の生命活動そのものを、自分の意欲や自分の意識の対象とする。彼は意識している生命活動をもっている。〔人間は生命活動をもつものとして規定されるときも〕それは人間が無媒介に融けあうような規定ではないのである。意識している生命活動は、動物的な生命活動から直接に人間を区別する。まさにこのことによるのみ、人間は一つの類的存在なのである。……彼自身の生活が彼にとって対象なのである。ただこの故のみ、彼の活動は自由なる活動なのである¹⁰⁾。」

人間の自然と彼の外部の自然との感性的関係は人間の感性的・対象的活動としてあらわれるのであるが、人間は自分自身の自然に対する関係をもつことができる。自らの感性的・対象的活動を自分の対象とすることができる。人間が意識的活動をする（意識している存在である）というのは上記のことを意味するのである。人間の活動は、自然の制約からのがれることはできないが、しかし意識的活動をなすことができるが故に——対自的存在なるが故に——自由な能動的活動でありうるのである。しかし意識は、感性的・対象的活動をはなれては存在しない。いいかえるなら、人間の身体と外部の感性的・対象的存在との感性的な相互関係においてなりたつ感性的・対象的活動なくして、意識はそれ自身超越的に存在するのではない¹¹⁾。

Ⅳ 実 践

マルクスによる実践概念は、人間の意識している感性的・対象的活動である。そしてこれはまた労働もしくは生産とよばれる。人間は意識的存在なるが故に、自分をも自己に対峙せしめ、それをつつみ、自分の全存在の観点から自分の活動を統御することができる。人間のおこなう労働や生産つまり実践はこのような活

動である。人間であることは、このような実践をなすことである。このように労働は意識的存在としての人間が行なう感性的・対象的活動であるから、その労働は必然的に社会的である。つまり人間は社会的存在なのである。人間が自然を対象とし、自然に関係するのは、もともと社会的存在としてである。人間の生活は社会的な労働——生産——なしには不可能である。人間が生きて人間が労働（生産）することと社会関係をもつことは同一のことである。このようにして人間が生きては、それが生産することであるから、生産の様式こそが人間の生活についての理論を形成するときの一般的概念になる。そして生産の様式の変化の要因として生産関係と生産力の矛盾が呈示されたのである。これについては、既に経済学批判の序言を引用して説明した。序言にある「人間の社会的存在が人間の意識を規定する」という場合の社会的存在は人間の生活を形成するときの重大なる要件ではあるが、それが人間生活を全面的に金しぼりにするのではない。人間生活——人間の活動——においては、自然的要件と社会的要件とは弁証法的に規定しあうのである。人間は社会的存在であることなしには自然的存在としての人間であることはできないとともに、自然的存在であることなしには社会的存在であり人間でありえないものなのである。このことは極めて簡単な例をとってみても明らかである。自然としての私の身体は他者に対する私の現存として、また他者の身体は私に対する他者の現存として、身体は社会関係の紐帯としての役目を果たすのである。この場合、自然としての身体は社会的存在としての人間の基礎となっているのである。しかしまた身体は社会関係の紐帯となる故にこそ、それは人間の身体であり、社会的身体でありうるのである。（身体は単なる肉や骨のかたまりではない。感情、意志、知能などの持ち主である。）

Ⅴ 個人の協働

マルクスによると、生産は社会的であった。『社会的生産』とはマルクスによると、協力関係にある現実的個人の生産活動である。彼の言葉をそのまま引用すると、「社会的という言葉によって、われわれはどんな条件のもとにおいて、どんな仕方でも、そしてどんな

目的のために、ということに関わりなく、数人の個人の協力を理解する。このことから、生産の特定の様式あるいは産業の段階は、常に協働の特定の様式あるいは社会段階と結合しており、そしてこの協働の様式は、それ自身一つの生産力である¹³⁾。」ということになる。人は「……特定の仕方では協働し、そして相互に彼らの活動を交換すること」によってのみ生産し——自然の物質を利用し変容する——。「生産するために彼らは相互に特定の連けいと関係に入り、そしてこれらの社会的連けいと関係の内部においてのみ、彼らの活動は自然にはたらきかけ生産がおこる。

生産者が相互にもつこれらの社会関係、彼らがそのもとにおいて彼らの活動を交換し、生産の全活動にかかわる諸条件は、無論生産手段の性格によってかわるのである¹³⁾。」マルクスはこの後段の点すなわち生産者が相互にもつ社会関係が生産手段の変化と共に変わることについて、「労働は使用する用具のちがいによって組織され、いろいろと分割される。手廻し挽臼は蒸気挽臼とは異なる労働分割（企業）を前提する¹⁴⁾」といている。

Ⅵ 生産力

上記の叙述の中から要点をぬき出して『生産力』という用語の概念をつくりあげてみると、およそ次のようになる。それはまずもって、感性的・対象的・意識的な活動をする現実的な労働力をふくむ。それは生きた労働者の社会的な力である。それによって労働者は、彼らの生存の自然的な、そして社会的な欲求を満足させる手段を生産する。更に分析をすすめてみると、生産力は、労働者、彼らによって用いられる生産用具、そして生産用具と手段によって条件づけられる特定の協働の形式を含む。人間の労働力の生産性を増大するものは、何でも社会の『生産力』を増大する。このようにして、この概念は、一方において技術・科学そして生産用具の進歩に表現されるところの人間の自然に対する支配¹⁵⁾を表示するが、他方においてまた生産の社会的組織すなわち人間の間の労働の協働と分割をも含む。

Ⅶ 生産関係

生産諸力の特定の段階において、それに対して矛盾するに至るといわれた『生産関係』によって、マルクスは何を概念していたであろうか。『生産関係』は法律的に言い直すと、基本的な『所有関係』である。人間は生産過程において他者と共に働らき、他者のために働らくのであるが、資本制のもとでは、生産手段を所有し、そしてそれを制御する人人すなわち資本家が、それを所有しない人人の上にあって大きな力をふるう。生産手段から分離され、ただ自分の労働力しか所有していない労働者は資本家に奉仕し、従属する。このように生産関係に等置された所有関係という概念がマルクスの階級論の出発点である。そしてさきにちょっと示されたように、生産関係と生産力とを軸として、彼の社会変動と革命の理論が構成される。——そしてそれはマルクスの言にしたがうと、「古典経済学をメスとして近代資本主義社会を解剖した」結果である。——それについての端的な表示を、われわれはさきにあげた『経済学批判』の序言においてみることができるのである。しかし私はここで彼の社会変動論を更に進めるのをしばらくやめて、話を最初のところにもどそうと思う。

Ⅷ 疎外された人間

マルクスは現実的個体的人間から出発した。この人間は無限に完全になりうるものである。人間の本質的諸力には無限に発展する可能性がある。労働する人間はまた創造や思想や行動の最高の形に達する力を潜めてもっている。この人間の潜在的なもろもろの創造力が停滞し発展しにくいのは何故か。それは、それらが階級社会の社会状態の下に窒息し、圧迫されているからである。現存の組織、資本主義は、ただに人間としての格別の能力の実行を妨げているのみならず、彼の動物的必要物——新鮮な空気や食物、性欲の充足など——でさえも奪っている。このように、マルクスは資本主義組織を、個体的人間の諸能力の発展のみならず、その生理的欲求の充足までも阻害するが故に有罪とした。このマルクスの見解について、われわれは彼の初期の哲学的著作の一つ『経済学・哲学手稿』（1844）の中に、最も明瞭なそして首尾一貫した表現を見出す。

マルクスによると、資本制生産においては労働者にとっては、彼らの昼のうちの比較的よい状態のあいだの働らきは、退屈な機械的な運動であり、それは人間にとって望ましいものではなかった。彼らの生活と労働は可能ながざり低いレベルを標準としている。——それは人間に、人間的な欲望のみならず、動物的欲望（動物として生命を維持して行くに必要な生理的要求）をも拒否するものであった。新鮮な空気に対する欲求さえ労働者からは奪われた。人は洞窟の中の生活に逆もどりする。それはしかし今や文明の所産たる悪臭がただよい疫病をはらむところである。そしてそこに人間はただ危険にさらされながら住んでいる。それは彼らにとっては、いつかとりあげられうる借家である。——すなわち家賃を支払わないなら追い出されるところである。この死体仮置場のために彼は支払わねばならない。プロメティウスによって最大の恩恵の一つとして企画された光の中の住居によって、野蛮は人間になったのであるが、その光ある住居は、労働者のためにあることをやめる。よごれ——人間界のよどみと腐敗——文明の下水——が人間生活の要素になっている。真の自然が無視され、腐敗した自然が人間の生活要素となっている。いな、人間は正常な自然の中で生きることができなくなっているのみならず、動物としてすら生きて行けなくなっている。もし人が人間として生きて行くことを望むならば「愛をただ愛とのみ、信頼をただ信頼とのみ等等交換することができる¹⁶⁾」ところで望みがかなえられるのであるが、人間の労働の奉仕は真の人間の生活と交換されないで、非人間的な生活、汚れた自然などとしてもどって来る。いな、それどころではなく、彼らには動物の生理を維持する条件も与えられない状態が生れて来ている。このような人間生活の現実、マルクスによってもたれていた可能の人間像からはるかに遠のいていた。マルクスが見た現実の人間は本質的諸能力から遠くはなれており、彼らは劣悪なものにされ、変形されていた。この人間非人間化について、マルクスは、それを疎外(Entfremdung)の結果としてみた。この疎外という概念は、その起源をヘーゲルにもつが、マルクスは、それを根本的に変形した。ヘーゲルにおいては、疎外は彼の他の構成物と同じく、全く精神の現象であった。

ヘーゲル左派によって、その概念は明らかに変えられはしたが、しかしなおそれは哲学的概念からぬけ出ていなかった。すなわちそこにおいては、それは人間自身の諸力が、彼の活動を統御する彼から独立の力または本質としてあらわれる状態であった。たとえば、フォイエルバッハは、宗教現象の説明において、疎外概念を用い、人人によって人間から独立していると考えられている現世の存在を、人間自身の発明と考えた。人間の宗教的空想が創造したところより高次の存在は、人間自身の本質の空想的反省であった。ところがフォイエルバッハを超えたマルクスは、もはや疎外を厳密な哲学的・心理学的現象としてあつかわなかった。むしろ疎外は、特殊な社会諸関係の文脈における、そして特殊な社会的・歴史的組織における、明らかに社会的な現象として分析された¹⁷⁾。すなわち彼はその初期の思想の中において、すでに疎外を哲学的概念から政治的・経済的色彩の強い概念へ移している。彼が彼の結論が政治経済学の入念な批判的研究に基づく全く経験的分析によって到達されたものであることを読者に承知してもらうことを意図していることは、『経済学・哲学手稿』をよめば明らかに感取できる。彼の分析は現実の経済的事実から出発する。それは彼がこの現実の事実自身に身をまかせたためではなく、それを変えるための分析であった。

『疎外』という術語は、マルクスが用いた Entfremdung（動詞は entfremden）の邦訳であるが、この疎外という訳語は、外化と訳されている Entäußerung の意味をも含みもっていると考えてよい¹⁸⁾。このことはマルクスの Entfremdung の用法に着目すれば首肯できる。マルクスはそれによって人間が自分の外に自分のつくったもの（これは自分自身であるが）を手ばなし、他人にゆずり、自分に疎遠なものにしてしまうことを意味させた。マルクスの思想体系は経済学・哲学手稿にはじまるこの疎外概念を中核とし、これによって整理されて発展し、『資本論』にまでいたったと考えることもできる。

マルクスによると、歴史的にみると、疎外の過程は人間が生産と生計の手段から分離されたときからはじまる。たとえば、イギリスにおいては、ヨーマンがエングローザー条令の条文にしたがって、彼らの土地が

ら追われたときがそれであった。人人は彼らの所有物から隔てられる。したがってもし彼らが餓死と浮浪をさけようと思うならば、彼らを待っている資本主義的企業家にその労働力を売らざるをえない。資本家と労働者の2集団が、このようにして相互に道具的關係に入る。この關係は真に人格と人格の關係ではない。本質的に道具的關係であり、便宜的な行為であるにすぎない。2者の間を真に結合さす要因はなく、それらは相互に分離されたままである。彼らの間は衝突する利害に基づき、基本的に異なる生活条件によって支配されているからである。

この關係に入るや否や労働者はその精力を物の生産に消費しはじめ、その労働力は商品の中に客体化される。しかもその彼の生産物を彼は支配することはできない。彼の外化である生産物は彼に疎遠なものとなる。そこに疎外現象がある。彼は多く生産すればするほど、彼の支配できない疎遠なものが多くなり、彼自身はいよいよ貧困になる。「すべてこれらの結果は、労働者は彼の労働の生産物を疎遠なるものとして、それに関係するというしくみの中に、すでに含まれている。何となれば、この前提に立つと、労働者が彼自身を費せば費すほど、彼が彼自身に対して造った疎遠なる客体的世界の力は強くなり、彼自身は——彼の内的世界は——より貧しくなり、彼自身のものはより少なくなる。……労働者は彼の生命を客体の中に入れる。しかし今や彼の生命は、もはや彼のものではなくして、客体のものである。だからこの活動が大きければ大きいほど労働者の物の欠乏はいよいよ大きくなる。彼の労働力の生産物が何であろうと、それは彼ではない。それ故この生産物が大きければ大きいほど、彼自身はより小さくなる。労働者の彼の生産物からの疎外は、彼の労働が客体すなわち外的存在になることを意味するのみならず、それが彼の外に独立に、彼に疎遠なるものとして存在することを意味し、そして彼に対立する独立の力になることを意味する。それは彼が客体に与えた生命が、彼によそものとして、敵対することを意味する¹⁹⁾。」

労働者は生産の過程とその結果に対する支配力をもたない。彼の労働は自己をすてる活動である。何となれば、彼はその中に自己の一部を入れこんだその生産

物を失うのみならず、全生産過程が彼の欲求にとって外にあるからである。「それ故労働によって彼は自らを肯定せず、自らを否定する。満足を感じないで、不幸に感ずる。彼の肉体的・心的な力を自由に発揮させないで、肉体をこわし、精神を荒廃さす。それ故労働者は自らを彼の仕事の外にのみ感得し、彼の仕事の中において自らの外にいるように感ずる。彼は働らいていないときにくつろぎ、働らいているときにはくつろがない。それ故彼の労働は心から欲してなされているのではなくして、強制せられたものである。それは強いられた労働である。それ故それはある一つの必要の充足ではない。それはその労働の外にある諸欲求を充足する手段であるにすぎない。その疎遠な性格は、肉体的あるいは他の強制が存在しなくなるや否や、労働は災厄のように忌避せられる事実の中に明らかにあらわれる²⁰⁾。」結局彼は生産過程を強制せられた活動、自由の喪失として経験する。彼は「もはや自らが彼の動物的なはたらき——食べること、飲むこと、生殖すること……の外には、どんなことにも自由に活動しているとは感じない。……そして彼の人間的なはたらきの中において、彼はみずからがもはや動物以外の何物でもないと感じる。……たしかに食べること、飲むこと、生殖することなども純粹に人間のはたらきの中にありうる。しかしそれらのはたらきをすべての他の人間的活動の領域から分離し、それらを究極の目的たらしめるところの抽象において、それらは動物的である²¹⁾。」

人間は労働者としては人間以外のものになった。何となれば人間は人間の可能的能力から分離されているからである。マルクスによると、「動物は生命活動と直接に同一である。」が「人間は彼の生命活動を彼の意志と意識の対象にする」能力をもっている。これが人間がたえずより大きな自由に到達することができるようにするところのものである。「動物は直接的な肉体的必要によって支配されるときにのみ生産するが、人間は肉体的必要から自由であるときにさえ生産することができ、そしてそれからの自由においてのみ真に生産する。」それであるのに、疎外された労働の状態のもとでは、人間の全ての意識的存在と生命活動すなわち「彼の本質的存在が彼の生存の単なる手段にな

る²²⁾。」

人間が自分のもち物である労働力によってつくった生産物は、彼のものではなくなる。彼は生産物と疎隔され疎外される。労働者は生産手段から疎外されているからである。そしてこれは人間に他者とのよそよそしい関係をつくらせる。殊にそのような関係は労働者とやとい主との間において甚だしい。人間がその生活の手段のために行なう活動そのものは疎外活動になる。生産物は労働者にとっては疎遠なものであり、生産過程そのものは彼の意識と彼の人間的必要と欲望にとって外的なものであるからである。人間は次第に彼自身から疎隔されるようになり、事実それは彼が他者から疎遠になることの中にあらわれる。疎外現象は資本制社会の根本から発生しているとマルクスは考えたので、彼は賃上げその他の待遇改善をことさら取りあげて主張することをしなかった。それらによっては疎外の状態の基底にある基本的関係は変化しないし、それは「奴隷いに対するよりよい支払い以外の何ものでもなく、そしてそれは労働者あるいは労働のために人間的状態と尊敬を勝ちとるものでもないであろう²³⁾。」とマルクスは考えたのであることをわれわれは知らなければならぬ。

疎外の状態の支配をうけるのは、ただに労働者のみではなく、非労働者も同様である。——もちろんそれは異なった形と異なった程度においてではあるが——「労働者において放棄疎外の活動としてあらわれたものは、すべて非労働者においては放棄疎外の状態としてあらわれる²⁴⁾。」労働者の肉体的必要そのままより以上の欲望をぜいたくとする資本家は、たとえ労働者より少ない度合ではあっても、みずからを自制と欠乏にしたがわせる。政治経済学にとっては、自制と欠乏、あるいは儉約と節約は、資本家にとっても労働者にとっても、主たる徳であった。「この驚くべき産業の科学は、同時に禁欲の科学である。そしてその真の理想は禁欲的でありながら暴利をむさぼるけちんぼと、禁欲的でありながら悲惨な生産をする奴隷である。……政治経済学は——その現世的で気まぐれな外見にもかかわらず——真の道徳科学である。すべての科学の中で最も道徳的である。自制、生命の否定そしてすべての人間的欲求の否定がその基本的教条である。あな

たがより少なく食べ、飲み、より少なく本を読み、より少なく劇場に行き、より少なくダンスホールに行き、より少なく集会所に行き、より少なく考え、愛し、議論をし、歌い、絵をかき、剣術をするならば、あなたはより多く貯える。——虫も塵もおかさないあなたの宝物すなわち資本はより大きくなる。あなたがより少なく生存すればするほど、あなたはより多くもつ。あなた自身の生命をより少なく表わせば表わすほど、あなたの疎外された生命はより大きくなる。——あなたの外化された存在のたくわえはより大きくなる²⁵⁾。」

Ⅷ 自由なる人間への過程としての共産主義

資本主義社会の分析によって明らかになったこの社会関係と過程の一般的状态は、もしも人間が自らを真に人間的状態に高めるつもりならば、排除されなければならないものであった。マルクスにとっては、これはただ「実践の方法において、人間の実践力のはたらしきによって²⁶⁾」のみ可能であった。もしも人間が彼らの本質的な力を発展させるつもりであるなら、もしも彼ら自らを完全にするつもりであるなら、彼らはすべてに先立って彼らの現在のやましい状態を排除しなければならない。この排除は一つの過程一つの運動であるべきであった。それ故、マルクスが『共産主義』とよんだところのものの建設は、目的ではなくして、人間のより大きな自由への手段、それ故に人間のより大きな人間性への手段であった。マルクスは同じく初期の著作『ドイツ・イデオロギー』においてのべている。「共産主義はわれわれにとっては建設されるべきなんらかの状態ではなく、現実がそれに適応しなければならないなんらかの理想ではない。われわれは共産主義を現状を排除する現実的運動とよぶ。この運動の諸条件は現実にある前提からでてくる²⁷⁾。」共産主義はそれに向って人人が努力すべき静的なユートピアではなくして、批判的革命的な運動である。

人間の力の発展をひどくきまたげている社会関係や状態の排除が、実践的に無制限に行なわれるならば、人間の創造的な力、自己完成と自己実現の能力は、無限に発展するであろう。人間は現実の社会状態の創造者である。しかし彼はいつまでもそれらの状態のとりこである必要はない。

マルクスの社会運動を批判的・否定的な運動としてとらえる思考方式は、ヘーゲルからうけつがれ、しかもそれはマルクスにおいて根本的に変形された。ヘーゲルにとっては全宇宙は理性によって抱かれている。宇宙のすべてのもの、無機物も有機物も自然も社会も理性とその弁証法的論理によって支配されている。理性は現実的開示の中にみずからを表現する内在的な力である。自然界においては発展と変化——物はそれらが常に可能的にあるところのものに現実的になるのである——は「直接的な、対立しない、妨げられない仕方」で起る。それは平和な過程であると共に盲目的な必然性をもったものである。人間界においては、そうではない。そこでは歴史の示すところによると、発展は人間の意識と意志に依存する葛藤の過程であった。存在の合理的構造は人間の精神によって捉えられ得た。そしてこれは實在に固有の可能性の現実化たる自由の必然的条件であった。

真理は厳密には形式的な措定の機能ではない。真理の基準は過程の中の實在である。このあたりのヘーゲルの見解について、マルクーゼ (Herbert Marcuse) は次のように説明している。「あるものは、もしそれがありうるところのもの、その客観的可能性のすべての実現であるなら、真理である²⁸⁾。」たとえばもし1人の者が奴隷であるなら、彼はそれにもかかわらず、彼の状態を変える自由を何ほかもっている。人は常に「1人の者が奴隷である」という文章の中にふくまれている関係を否定する可能性を見なければならない。ヘーゲルにとっては、あるものが直接的にあらわれる姿は、まだその真の姿ではない。人が最初に見るところのものは、否定的状態である。そのものの真実の可能態ではない。あるものは「この否定性を克服する過程の中においてのみ」真実になる。「だから真理の誕生は存在の所与の状態の死を要求する。……すべての形式はそれらがそれらの概念にあてはまるまで、それらを取消したり、変えたりする理性の解明運動によってとらえられる²⁹⁾。」マルクーゼのヘーゲル哲学についてのこれらの言葉の中に革命的側面をみとめることができる。あらわれたままの諸事実は、その場のそして部分的な真理以上のものではありえない。何となれば、それらは真理の開示における1否定的局

面を示すにすぎない。そしてその真理の開示は、その局面の破壊と超越によってきっかりと行なわれるからである。

『ある』の世界は常にその中の可能性を開示するために批判され、いどまれなければならない。現存の事実的秩序は超越されうところの一時的な否定態である。現存の秩序が批判的に対立され、究極において越えられなければならない、人はそれを把握し、その可能性を解放することはできない。事実は確実なもの——positives——ではない。また現存する事実の秩序は犯すべからざるものでもない。反対にその秩序は人間たちににせの人間的条件を強いるから、それ故人間たちは彼らがありうるより少ないから、人人はその秩序を変えることを努めなければならない。

このようなアプローチの仕方は実証主義のそれに端的に対立する。実証主義は直接的に与えられた事実を真理としてあつかう。実証主義者は普遍的概念を拒否し、直接的に観察することができ、そして実証することができるものに真理を還元することによって、「まだ事実でありえないものをすべて真理の領域から³⁰⁾」しめだす。マルクーゼによるマルクスの思想の解釈をのべると、マルクスはヘーゲルと同じく——ヘーゲルの体系におけるある点までであるが——真理を特殊な所与にかぎることを拒む。彼は「人間や物の可能性は、それが現実にならなくなってあらわれている姿や関係につくされないこと³¹⁾」を確信した。いうまでもなく、これはマルクスが事実をとりあげなかったとか、重んじなかったとかいうことを意味しているのではない。そのような意味にとることは明らかに誤りである。むしろ彼は常にやむことのない歴史過程——マルクーゼの思考の過程をはなれていうならば、これは同時に自然の運動の過程である——における否定的契機にすぎない与えられた事実の一時的性格を意識していたと考えられるべきであろう。だからたとえば、資本主義の現存の事実の秩序は、マルクスによって入念に研究されたが、それは一時的な資本主義を否定する方法を学ぶためであった。と考えられる。革命の可能性はある明らかに客観的な経済的・政治的な諸条件にもとづく。そしてこの諸条件は資本主義の構造と傾向の分析によってとらえられることができた。この事実の知識

によってのみ、マルクスは労働者階級の革命的行為を導く一般理論を展開することができた。さらに彼が真なりと思ったところの経験的一般化あるいは理論的提言に到達するや否や、彼は常に応用すべき歴史的に特殊な条件を指示した。たとえば生産関係が人間の意識をもふくめて人間の性格を規定するという提言は、マルクスによって社会的歴史的事実として認められるが、その事実によって資本主義社会においては人間の疎外された状態が生れていることが認められる。マルクスはこの社会における生産関係がいびつな人間関係を形成し、そして人間から人間的性格をうばうことを認めた。このようにして現実に対する「マルクスの提言は批判的なものであり、それは意識と社会的存在との間に行きわたっている関係は、真の関係が光をあびる前に克服されねばならない誤ったものであることを意味している。唯物論的命題の真実は、かようにしてその（現に行きわたっている）関係の否定において実現さるべきである。マルクスはしばしば彼の唯物論の出発点は彼が分析する社会の唯物論的性質によって彼に強いられることを強調している³²⁾。」

さきにもいったように、マルクスは古典経済学というメスによって近代資本主義社会を解剖し、それによって人間関係理解の出発点は唯物論的たらざるをえないことを理解した。そして現実に生活している人間が疎外状態から脱出して、真の人間になるには、どうしたらよいかをさぐった。人間から人間性を奪い人間を物化する社会から人間を解放する道をさぐった。物質の世界は必然の法則によって支配されているが、人間は必然の国から出て自由の国に入らねばならない。人間は自らの外なる物によって自らの運命を決定されるのではなく、自らの運命を自ら意識的に決しなければならぬ。そのための方途を発見し、それを実践することがマルクスの理想であった³³⁾。われわれは、これがマルクスの理想であったことを彼の初期の著作においてのみならず、成熟期のそれにおいても見だすことができる³⁴⁾。人間の非人間化が近代社会の生産関係に基づくとなると、人間が再び人間性を奪回する方途は、生産関係を革めるところに求められねばならない。生産手段の所有者と労働者とが分離され、生産物が労働者のものでなくして、生産手段の所有者すなわち資本

家のものである生産関係が革められねばならない。すなわち生産手段が働らく諸個人のものである社会に革められねばならない。しかし諸個人は個個ばらばらにあるのではなく、協合した諸個人でなければならない。何となれば、生産は社会的であり孤立した個人は生産力をもたないからである。ことに近代の生産技術は科学的知識と共に増強されているのであり、科学は多くの個人の知識の集積の上になり立っているから、生産力は個人にではなく、社会に帰属しなければならない。ところで近代社会は生産手段の個人的所有の上になり立っている、それが人間疎外の原因だとすると、その制度を改め、生産手段の社会的所有が打ち立てられることによって人間疎外が止揚されるという論理が多くの社会主義者によって支持されている。がしかしいざ社会一色にぬりつぶされ、個人が埋没した社会において、しかもその社会を一部の人が統御するときは、個人の人間回復は不可能になるのではなかろうか³⁵⁾。個人個人がそれぞれ人間として生き、かつ生産が社会的性格を失わないためには、協合しかつ生産手段から疎外されていない諸個人が生産に従事することが必要になってくる。ここで「協合した（あるいは連合した）諸個人」というのは『哲学の貧困』(Misère de la philosophie, 1847)において、はじめて *Les individus associés* と書かれているものの邦訳である。この言葉はその後資本論 (Das Kapital, 1867) において *Assoziierte Individuen* として出ている。これらの言葉は、マルクスの思想の全体系の中においては、ある時は工場内での協業者を意味したこともあるし、別の時には社会的規模においての協業を意味したこともある。しかし協合した諸個人というとき、独立の自由な個人の協業の意味が強くていっているといわねばならない。われわれは人間としての個人の回復は独立の自由な個人の協業において可能であることを主張したマルクスを見のがすわけには行かない。マルクスの初期の著作の中において濃厚ににじみでているヒューマニズムが後期においては色あせていると主張する人があるが、しかし現実的に人間性の回復のもとになる「自由に協合した諸個人」という概念は消え去ってはいない。マルクスは資本論において「社会の生活過程は、物質的生産の過程に基づいているのであるが、それは

それが自由に協合した諸個人による生産としてあつかわれ、そして設定された計画に従って彼らによって意識的に規制されるにあらざれば、その神秘的なペールをぬぎさることをしない³⁶⁾。」とのべている。

マルクスは社会主義ないし共産主義を究極目的としたのではなかった。私的所有の絶対性の廃絶と生産手段の社会化が疎外された労働の廃絶における第一歩である。しかしこれによって各人の自由なる発展がすべての人の自由なる発展のための条件であるような協同にいたるであろうことは必ずしも保障されない。すべては人人が社会化された資源にどのようににかかわるかに依存するであろう。もしも人人が自由に協同せず、そしてこれらの資源を彼らの人間的必要の充足にあてず、彼らの人間的発展をのばすために利用しないならば、そのとき生産手段の社会化は、ただ屈従の一つの形式を他の別の形式ととりかえたにすぎない。マルクスはこの危険を予見し、個人に対峙し個人の人間性を奪う社会——この社会は真の人間の社会ではなく、人間の生活を破壊する似而非社会、特定の個人ののための社会である——について警告した。「なかんずくさけらるべきことは、社会を個人に対する抽象としてつくりかえることである。個人は社会的存在である。彼の生活は——それ故社会生活の表現であり、あかしである³⁷⁾。」マルクスにとっては諸個人の欲求と自由が最高位にありうる社会こそが究極の人間の社会である。

X ま と め

マルクスにとっては本来的な人間は無限の可能性をはらんだ現実的・個人的人間であった。しかし人間の現状はこの本来的なあり方から遠く隔離されている。人間は本来的存在から疎外されている。この疎外の状態は否定され真の人間にいたる道が奪回されねばならない。その方法を彼は近代資本主義社会の分析を通じて発見した。それが彼の社会主義革命論であり、共産主義である。だからこれらは人間がいたる究極目標ではない。それは尊厳なる人間性に到達する過程なのである。

マルクスの後期の著作においては初期の著作におけるようなヒューマニズムが姿を消したという人があるが、しかしマルクスはヒューマニズムを捨てたのでは

ない。ヒューマニズム実現のためのゆるぎなき現実的方法のための理論構成が彼の後期の著作の多くの部分を占めたと考えらるべきではなかろうか。後期のぼう大な著作の意味を根底において力強く支えるのは初期の著作において情熱を以って語られているマルクスの人間尊重の精神ではなかろうか。このように考えることがあながち暴論ではないことはたとえば彼の最後期の著作『資本論』を入念に読んでみれば承認せられるのである。
(1980. 1. 10)

注

- 1) 経済学・哲学手稿 (Ökonomisch-philosophische Manuskripte, 1844.) 岩波文庫版206頁。

マルクス・エンゲルス全集、大月書店刊、第40巻、(1975年) 500頁。

- 2) 同前。

- 3) K. Marx und F. Engels; Die Deutsche Ideologie, 1846.

マルクス・エンゲルス 8 巻選集、大月書店刊、第 1 巻172頁。

以下本稿においてかかげるマルクス・エンゲルスの論文の拙訳は 8 巻選集や全集の訳と必ずしも一致してはいない。

- 4) 三木清が昭和 7 年の著『歴史哲学』の中で「社会的身体」という言葉を用い、また歴史的事象を生み出す人間的主体のあり方を「事実」とよんでいるが、これらの言葉によってあらわされている人間把握は、マルクスの人間把握に似ていると思われる。また彼の最後の著書『構想力の論理』は『歴史哲学』においてのべたことをさらに具体的に叙述しようと意図したものと考えられるが、この書において彼は「主体性における身体」という言葉をつかっている。これは恐らく生理学的な「客体性における身体」からの区別を明示するために考え出された用語だと考えられるが、ここに『歴史哲学』における「社会的身体」が名をかえてあらわれたのだとしても、あながち無理な推測だとはいわれないであろう。

- 5) Die Deutsche Ideologie.

マルクス・エンゲルス 8 巻選集第 1 巻175頁。

- 6) 同前172頁。
- 7) 同前175頁。
- 8) 物質的生産諸力は弁証法的関係にある自然と社会の両契機をはらんでおる。すなわち人間の生産は自然と社会との両条件からのがれることはできない。
- 9) Zur Kritik d. p. Ökonomie (1859), I Heft, Volksausgabe, besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau, 1934, S. 5.
マルクス・エンゲルス 8 巻選集 第 4 巻 40—41 頁。
- 10) マルクス・エンゲルス 8 巻選集第 1 巻 76—77 頁。
- 11) ニコライ・ハルトマン (N. Hartmann) は彼の多くの著作 (たとえば主著 Ethik) において、存在層間の法則を主張し、下の層は上の層の基礎になる。すなわち下の層なくしては上の層はありえないが、上の層は下の層から自由であるとしている。この見解はマルクスによる感性的活動と意識との関係把握に類似している。
- 12) Die Deutsche Ideologie.
マルクス・エンゲルス 8 巻選集第 1 巻 182—183 頁。
- 13) K. Marx; "Wage Labor and Capital" in Marx and Engels, Selected works, vol. I, (Moscow; Foreign Languages Publishing House, 1950).
マルクス・エンゲルス 8 巻選集第 2 巻 199 頁。
- 14) K. Marx; Misère de la philosophie, 1847.
マルクス・エンゲルス全集, 大月書店刊, 第 4 巻 (1960 年) 154 頁。
- 15) 人間が科学・技術によって自然を支配するとき、人間は自然の法則 (たとえば物理的法則とか生物界の法則など) を無視して、それを行なうことはできない。人間はいわば自然に従うことによってのみ自然を支配できるのである。人間は自然からのがれることはできない。
- 16) 経済学・哲学手稿。
マルクス・エンゲルス 8 巻選集第 1 巻 88 頁。
マルクス・エンゲルス全集, 大月書店刊, 第 40 巻 (1975 年) 489 頁。
- 17) マルクスが疎外という言葉をもっと使っているのは『経済学・哲学手稿』においてであり、その後の著作においては、疎外という言葉を用いることが減少しているが、しかしこの事実は彼が疎外の問題についての関心を弱めたためではない。
- 18) entäußern (名詞は Entäußerung) はある物を手ばなす, 放棄する, 譲渡する, 断念する (sich eines Dinges entäußern) などの意味をもち, 哲学用語としては外化と訳されている。entfremden は「ある人からある物を遠ざける」(jm. etwas entfremden, etwas von jm. entfremden), 「ある人をしてある物にそむかせる」(jn. einem Dinge entfremden) こと, また「ある人と疎遠になる」(jm. entfremden) ことを意味する。以上によってみると, 疎外という訳語は Entäußerung と Entfremdung の 2 つを合せてふくんでいるといえてよい。
- 19) 経済学・哲学手稿, マルクス・エンゲルス 8 巻選集第 1 巻 72 頁。
- 20) 前掲書 74 頁。
- 21) 前掲書 75 頁。
- 22) 前掲書 76—78 頁。
- 23) 前掲書 81 頁。
- 24) 前掲書 83 頁。
ここで活動と状態を対置しているのは、労働者における現実的実践的なあり方は、非労働者においては観想的なあり方としてあらわれる。という意味であらうか。
- 25) 経済学・哲学手稿。
マルクス・エンゲルス全集, 大月書店刊, 第 40 巻 (1975 年) 470—471 頁。
- 26) 前掲書 463 頁。
- 27) Die Deutsche Ideologie. マルクス・エンゲルス 8 巻選集第 1 巻 188 頁。
- 28) H. Marcuse; Reason and Revolution, 2nd ed. (Boston: Beacon Press, 1954) p. 25.
- 29) op. cit. p. 26.
- 30) op. cit. p. 113.
- 31) op. cit. p. 113.
- 32) op. cit. p. 273—274.
- 33) マルクーゼをはなれていえば、こうすることが人

- 間をもふくめての自然の本来のあり方である。
- 34) マルクスの若き日のヒューマニズムは後期においては姿を消したという人があるが、それは当たらない。
- 35) マルクスにおける人間性回復における人間はもともと感性的・对象的・意識的存在である自由なる個の人間であり、彼が人間性回復のために資本制社会を変革し共産主義社会建設をとるもの、このような個の人間たることを取りもどすためにである。
- 36) Karl Marx—Friedrich Engels Werke, Band 23, Institut für Marxismus—Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1962, S. 94.
- K. Marx; Capital, vol. I, (Moscow; Foreign Languages Publishing House, 1954) p. 80.
- マルクス・エンゲルス全集第23巻 a (1965年) 資本論 I_a 106頁。
- 37) K. Marx; Economic and philosophic Manuscripts, (Moscow; Foreign Languages publishing House, 1961) p. 105.
- マルクス・エンゲルス全集, 大月書店刊, 第40巻 (1975年) 459頁。

Zusammenfassung

Der eigentliche Mensch, den K. Marx begriff, war “gegenständlich, sinnlich, natürlich und bewusst,” ferner lebte er in der Gesellschaft, aber er war nicht in ihr verschüttet, und eigentlich war er ein wirklich-persönliche Mensch, der die unendliche Möglichkeit hatte.

Aber die neuzeitliche kapitalistische Gesellschaft hat diesen eigentlichen Menschen in den selbst-entfremdenden Zustand gelegen und ihm das menschliche Leben weggenommen.

Daher dachte Marx, daß man zuerst die kapitalistische Gesellschaft umstürzen und die Gesellschaft für die freien Menschen aufbauen müßte, um den wahrhaftig menschlichen Zustand zurückzunehmen. Auf dem Wege des Aufbaus dieser Gesellschaft gäbe es Die Bewegung des Sozialismus oder Kommunismus. Also wäre diese Bewegung nicht das End-ziel, sondern der Prozess zum End-ziel. Das End-ziel der Menschen wäre die Bildung derjenigen Gesellschaft, die die Möglichkeit der freien Person unendlich verwirklichen könnte.

Die Wurzel vieler marxischen Werke ist der oben erwähnte Gedanke über Menschen, nur daß in seinen ersten Werke, z. B. in “Ökonomisch-philosophische Manuskripte”, der Humanismus oft gefunden ist und in seinen zweiten Werke, z. B. in “Das Kapital”, die Analyse des kapitalistischen Wirtschaftssystems öfter gefunden ist.